

Performen 参

DENDOH NATSUKO ANTI SYSTEM #013

美弥子は夢を見た。
夢の中で美弥子は、まあだ天竺を目指していた。

長い。この旅は想像以上に長い。確か出発したのは4年前。
車で行きゃあ、あっという間なのに、半年たっても免許が取れない。
ジェンキンスさんですら取ったというのに。
この4年で旅の仲間も様変わりした。
三蔵サイトー法師は怪物に食われて死んだし、豚は途中でたいらげられ、カッパは川に流れていった。
今は二代目三蔵のミチイ法師（八王子市網ヶ丘）に替わったわ。
モジャモジャの冠を取るとツルツル。法師らしいじゃない。
新沙悟浄には、サワムラ。見たまま。新猪八戒には、なしお成。いわずもがな。
馬は、馬キチガイのナカガワ。草食動物系。宇宙船サジタリウス。（意味不明）
さあ、ガンダーラめざして逃げ逃げ。

一向は燃え盛る山の前にたどり着いた。テレビで見たことあるある。
何とかっていう扇で、あおいで火を消すの。
そうすれば牛魔王がボールを。チチ。
ん？何かと混ざったが構いやしないわ。けしゃあいいのよ。
なしお成が持つてる「露口」って書いてある扇（というかウチワ）を借りるわ。

ふと、美弥子は扇のさきつちよに目を奪われた。
あたしだ。
この扇、あたしの顔をしている。
この扇、先つちよにあたしの顔が乗っている。
いや、違う。
扇ではない。コケシだ。あたしの顔をした巨大なコケシだ。
コケシ「…い…て。」
何か呟いている。あたしの顔をしたコケシが何か呟いている。
コケシ「…さ…い…て。」
…さいて…？
コケシ「…さ…い…て。」
裂いてたって、何を？
コケシ「…さ…い…て。」
わ、わかった。とりあえず、裂けばいいのね、裂けばいいのね。
コケシ「…グサイから離れて。」

次の瞬間、美弥子は扇をおもっくそ扇いだ。
消えるどころか、大きくなる火。
火は酸素があるとよく燃えます。（偽でんじろう先生）
あ、みちい法師のモジャ冠が飛んでいった。追いかけていく法師。
旅は果てしなく続く。
遥かなるガンダーラ。ゼイ セイ イット ワズ イン インディア タケカワ ユキヒデ。
年明け出発の香取慎吾一行には負けられない。
そこで夢は終わる。

目覚めた美弥子は、師走でキラキラする池袋の街にいた。
頭がスースーする。美容院ならぬ理髪店にて、面白カットにされたアタシ。
皆から、コケシと呼ばれるアタシ。上等。コケシカット上等。アタシコケシ。
おっと駅前にて、知ってる顔を発見。あれは確かTV Z10月号でお世話になったマ○レーヌ○本さん。
脳裏にリフレインするコケシの声。
「裂いて。」

あまり面識はないが美弥子は、やおら声をかけた。
「あの！」と、肩をわしづかみにする美弥子。
「きょー！」と、一目散に逃げ出すマ○ス松○さん。
立ち尽くす美弥子。（ほぼノンフィクション）
今回ばかりは、アタシの心が裂けたぜ。
そんな終戦60年目の暮。

—デンカツ・サーガ第13章『続西遊記～コインランドリーでよくパンツが盗まれます』より

DENDOH NATSUKO ANTI SYSTEM #013

Performen 参 【爸豁皿】～父がうつわを裂いている～

脚本／導演 竹田哲士



■本公演記念 特別対談<第4回>

竹田哲士 (電動夏子安置システム演出担当)

×

渡辺美弥子 (『壺』『式』『参』出演)

小原雄平 (『壺』『式』『参』出演)

中川崇宏 (『式』『参』出演)

狩野智子 (『壺』『式』出演・『参』ヘアメイク)

×

聞き手: 村上朋弘 (『壺』『式』『参』プロデュース 宣伝美術 他) + 大鹿君

12月某日、稽古の後で例の居酒屋。脚本家竹田の「今回で『Performen』は…」の言葉とともに、過去の公演に参加し、今回も役者・スタッフで参加するレギュラーメンバーの面々が集まり、過去から現在に至るまでの『Performen』への思い語り合おうとしました。…あくまで語り合おうとしてみました。

■最後にそうなので、お集まりいただいたわけですよ

中川: え、マジで?!

狩野: 最後なんですか?

中川: 俺はドラクエみたいに、ロト三部作が終わって次は全然関係ないのが、ルー的にアレでまた別の『Performen』が始まるみたいな事だと思ってたよ。

竹田: まあそういう事ですね。

中川: で俺は絶対言いたい続ける気なんだろうなと思ってた。

竹田: あ、正しい。

—— 「父とセガレ」編がこれにて終わらしい。

中川: ていう事なんだろうなと思ってた。

—— 竹田さんは「父とセガレ」編はやりつくした感があるわけですか?

竹田: やりつくしたというか、もう飽きたから(笑)。

—— 飽きたから?!

竹田: 3回もやりやもうやる事もないよ、お父さんと(笑)。

中川: いやむしろよく3回まで持ってきたなっていう、ねえ。

竹田: これはパターンだから。やるとしたら変えなきゃね。

—— 4回目?

中川: 4回目あるんだ?

竹田: ん? 4回目? 2年後?

中川: 2年周期なんですね。

竹田: そうだよ。次回は30歳だよ。どーすんの?

■体のキレへ劇団のあり方と変わり方

中川: 30歳の芝居がパフォーマンスだなんてやだよ。(小原に) だってねえ、確実に2年経つごとにねえ、アレじゃないだろうなですか? 体のキレがなくなっていくんだよ。

小原: え? カズは38歳の今でも現役ですよ?

—— アハハハハハ!

竹田: 勇気ですぞねえ(笑)。

小原: シンドニーで頑張ってるわけですよ。

中川: まあ下手にオリンピック感覚で4年よりはいいかもしれないけどさ。

—— オーストラリアかあ。

中川: その前にブラジルから始まらなと。イタリアにもクロアチアにも行ってませんけどね我々は。

竹田: なんか中国っぽいところね。

中川: あー中国公演してみたいですね。

竹田: 紫禁城で。

中川: 天安門広場で。

竹田: 日中の架け橋になりましょう(笑)。

—— こないだ映像の編集のために『壺』『式』『参』を何回も見たわけですよ。そしたらもう若い若い。

美弥子: そりゃ若いでしょうねえ。

狩野: 何年前? 『壺』で。

—— 4年前。

中川: 約4年前ですよ。

—— 2002年3月でことになるのよ。

竹田: そうですね。

—— 年度でいえば2001年度3月、みたいな。

中川: つまり1年と8ヶ月くらい経って、みたいな感じだったんですよ。

—— そうそう。だからね、あのころの映像が若い! ビックリするよ。体のキレもさあ。まるで違うの。

中川: いやー、狩野さん。若かったです(笑)。ビデオで見たら。取り立てて。

竹田: 美しかったです!(笑)

—— 過去形?

狩野: えーちょっと待って待って!

竹田: 肌のハリが(笑)!

中川: 惜しむらくは!!

竹田: 4年という歳月が!

中川: 今でこそ! ……今はね、艶があるね。

竹田: 大人の艶が出てきましたね(笑)。

狩野: 最近ね、ずっとね…

中川: オトナの……テリが!

竹田: あはははははは!

狩野: 必死でマッサージを試みるんですよ! 美肌マッサージを。あーイタイところ突かれた。

中川: あ、そうなの? 自覚あるんだ。

狩野: 最近ね、この豊胸線が笑って出来た後に、その溝が埋まらないのよ。

中川: 埋まらない…埋まらないってやだなそのフレーズ(笑)。

狩野: ここ(頬)にね、くっきり残ってるのよ(笑)。

中川: 余韻が残っちゃってるわけですね。

狩野: 片っ端から立ち跳んでさ。

中川: 深くましい努力をしているわけですね。

—— (話を戻して) 動きのキレとかが全然違うのね。

美弥子: あは、あはははは。

小原: でもそれはあれじゃないの?

中川: 若さもあるけど。

小原: そうそう。(明大) 劇研から肉練とか、ずっとやってきた事をやってさあ。

中川: 『壺』の時なんかね。

小原: そうそう。

美弥子: 肉練やらなくなっちゃったからね。

小原: そうやらなくなったし、

中川: やっぱある程度(体を)いじめてたからね。

小原: そういうのが減ったからですよ。

中川: 今回なんかだと「『参』やりますよ」ってなってるから鍛え始めたりね。

—— 走ったりとかね。

中川: そういう時期あったよね。

—— 『式』の時は走ったね。

小原: やったなあ、『式』の時。

—— それから来てすぐの頃だから『Belle Epoque』の時、そういう点では体を酷使する劇団だったよね。

小原: うん、そうそう。

—— それがいつの間にか、体を酷使するよりも稽古場で作っていく側の方を重視するようになっていったんだよ。

中川: それはそれで大事な事ですからね。

竹田: あの時はさ、レギュラーだけだったから。

小原: うんうん。

中川: ああ、はいはい。

竹田: いじめてよかったんですよ。けど客演が増えるとなんかちょっと気を使っちゃうんですよ。

小原: なるほどね。

竹田: わざわざ稽古に来て走らせるのもどうかかなと思っちゃうんですよ。

—— (役者それぞれ) その人なりの作り方があるとして。

竹田: そう。あるとして。それで稽古方針を代えざるを得ない。今ほとんどレギュラーが少なくなって、コアな人たちしかない(笑)。この人たちは多分頼めば走ってくれる人たちなんですけど(笑)。

—— そうだね。

竹田: それはもう劇研でなれてるから。

中川: (鍛えるという事が) 染み込んでるからね。



Performen 参 Show Program

日奇
月奇

一白 《Routineman》

二黒 《Watchman》

三碧 《Delayman》

四緑 《Talkman》

五黄 《Taboومان》

六白 《Flowman》

七赤 《Chairman》

八白 《Performen》

九紫 《Cycleman》

星奇



肉練でガッツリやってたところが今は多少の確古にね。コミュニケーションをとるとか、それ多分客が増え影響ってあるんだろうね。

美弥子：まあ肉練はいざとなったら各々やるんですよ。

中川：時間的な問題もあったしね。4時間しかない稽古時間だから、顔合わせなくても個人でできる事は、みたくないさ。

—— そういふ点で変わったね。4年、いや今6年目突入。

■Performenが作られることになった頃。

—— さて『Performen参』はどうなんですか？

竹田：『参』はね……どうなんですかね？

美弥子：フッフ。

—— えーつ(笑)。

竹田：ちょっとまだね、書いていてこの段階で全体像が見えてないんですよ。

中川：本書きあがってるんですけどね(笑)。

竹田：パフォーマンスというのは、基本的にいつも全体像が見えてないんですよ。何処が完成点なのかよくわかんない、ところはあるんです(笑)。普通の芝居とは別でなんか、ストーリーがないから俺も追えてないんですよ。断片的なシーンを見て、その話が最終的に何処に収束するとかいうのがないから。

—— 『参』の時は？

竹田：ないです。絶対ない。

—— 『参』の時に面白かったのが、第1回公演から4回までの間はわりと「次どんな公演うつって話をしてたんだよね」

中川：『Performen』という公演が出来た流れという経緯は何なんですか？完全に主宰のアレなわけですか？

—— 竹田さんから「次やってみたい事があるんですけどいいですか？そろそろやってみようかな。」てな話があった。

中川：何か提案したりとかはないんですか。

—— うんそこからは全部竹田さんだけ。

竹田：今でも覚えてますよ。

アレは御茶ノ水の村さ来てした。

村上：あ。カラオケジョウコの近くだ(笑)。

中川：うわ懐かし。

竹田：小原君ラーメン屋行かなかったっけ？

小原：行った(笑)。

美弥子：高菜しか食わないのね(笑)。

中川：龍々軒。

—— あー、龍々軒隣にあったねえ。

中川：高菜がね、いくでも食えるんですよ。

竹田：ライス頼んで高菜を山盛りにして食ってる印象的な小原さんが。

小原：スゴイやな客だよ(笑)。

竹田：皆ラーメン食ってるのに。

小原：あつたらシカもやるでしょ。



—— なんとなくついてきていた大庭君。うなづく。

—— 澤村化してるぞあいつ！

中川：仲間増やそうとしてる！

美弥子：てか「シカもやるでしょ」だってハハハハハ！

中川：同意を求めてるわりにオウヘイだよ(笑)！ほぼ命令に近い。

竹田：……シカって呼んでるんですか(笑)？

美弥子：初めて聞いたけど！

中川：時々「シカアツ」って呼んでるよね。名前鬼の時とか。

小原：あー、呼んでる呼んでる。

竹田：小原城で仲良く談笑して、肩つき合わせてる飯を食ってるのが印象に残ってる。

小原：小原城に住まわされてるんです。

竹田：家老だ！

—— (話を戻す)『Performen』の話を最初に聞いたときはね、ビックリしたよ。ストーリー性のある芝居を常にやり続けたいと思ってたから、『Performen』は「ストーリーのないストーリー」みたいな芝居でね、一番最初、パフォーマンス系の舞台ってわりと早稲田系の劇団とかがよくやっててさ、そういうのに近いのかなあ。

中川：でも違ったよね。

—— うん。それともまた違った。だから観るまでは判らなかつたんだよね。

中川：その頃俺は村上さんの果敢の家まで体面する相談をしにいったんですよ。

—— あー、そうだったねえ。12月。

中川：その時に「次回はこういうのをやるらしいんだよ」って見せられて。

—— (竹田に)過去の『Perfromen』はやった結果、思い通りに出来てはいたの？

竹田：うーん、どうなんだろうねえ。これアレなんです。電夏はメソッドを持ってないから、そういうのが出来ればいいんですけど。結局そこで試してるんですよ。結局そこに行き着いてないんですよ。

—— 行き着いてないんだ。

竹田：うん。なんだろう。お話の『Performen』の一つ一つのシステムを使って、こが書きたいんですよ。

—— 『劣情もよおす六面体』のような？

※『劣情もよおす六面体』…2004年12月公演。あるルービックキューブを回転させると、そこに該当する部屋の時音が昔や未来に変わってしまう家と、それぞれの時代に人間に関わっていたためにこのキューブに閉塞される人々の話。

竹田：そうそう。
中川・小原：ふんふん。

竹田：だから「シチュエーション」があつて「キャラクタ」について、そこに「ルール」があつてこの3本で話を作ると、去年の12月みたいな芝居になるんですよ。そのルールを考えるためのお芝居だから、そもそも他の本公演と違うような気がする。

中川：話とか期待されても困ると(笑)。

竹田：困るんです(笑)。

中川：でも本公演でやる以上は、というのもあるんですよ。

竹田：あの椅子取りゲームとか何の参考になるかよく判らないけど、そういう方法があつたらいいかなと。

—— つまり『Performen』の中で部立てされた一つ一つが、それぞれメソッドを作る可能性を持った挑戦なわけか。

竹田：そうそう。だから『劣情…』はね、僕の中ですごく面白いんですよ。ルービック・キューブ…まあ大変だったろうけど(笑)。

小原：あせつたよな(笑)。

中川：わー(笑)。順番が決まっても1回崩れたら終わりだよな(笑)。

竹田：40分目くらいで誰かが間違ったらもうアウトだもんね(笑)。

中川：そして誰かが間違えても公演中だから情報が来ないでしょ。舞台に戻ってみたら見たことのない模様なんだよ(笑)。しかも途中で時々揃うシーンとかもあつたから。一面だけ揃えなきゃと言われても舞台そつちのくいでしてよ。

竹田：DVD見るとですね、完全にうわの空でやる奴とかいるんですよ(笑)。

■シチュエーションコメディと「ルール」

竹田：シチュエーションコメディを作ろうかなと最初は思ったんですよ。でもねシチュエーションにも限りがあるのがわかってきたんですよ。使い古されているのが何パターンか。となるとそういう所だけいじっていくしかない。

—— シチュエーションに「ロジック」「ルール」を持ってきて、新しいものを作る？

竹田：『劣情…』も普通に「6つの家の話」だったらそれで成立するのかもしれない、一つの家に集う人たちの話でも成立するだろうけど。そこに別のルールを一つ加えるってことで、話更には絡んで…っていうのを今、一つ一つ試してるんですよ『Performen』で。

美弥子：私は『Performen』が一番電夏らしいと思う。電夏の役者にあつてと思う。

—— やつていてどう？

中川：俺はもう真逆ですね。

狩野：私は一番やつていて楽しかったけど。

美弥子：感情の流れがないのよ。

竹田：あー、うんうん。

美弥子：ほんでその分結構何でも出来るじゃん。



—— それがいいのかどうかは別問題

中川：それだけ、第1回から第4回まで公演をやつてきて、ズブズブの感情から入る芝居とかが多かつたんですよ。本公演で、感情作つて。それを表現してっていうのが、で、飽きたんですよ(笑)。

美弥子：飽きたやつらー！

竹田：飽きたって言うか嫌だったんですよ。だからパンフレットに書いたんですよ。「キレイな話は…」

—— もういやなんですよ。って、書いたねー。

竹田：予告文句としてさ。だから話もなくて、感情とか一切抜きにして、状況とかから感情みたいなものを抜いて後付けるのをやろうかなと思つたんですよ。

—— 確かに感情に似たものは後付けされるね。今回のワークショップ覚えてる？紙を椅子に見立てて舞台上に沢山は敷いて、役者は自分が近くにいたい人「A」と遠くはいたい人「B」を心に決めておく。あとは順番にそのような位置の椅子を選んで座っていく。これをやつた後で、竹田さんが「この人は誰かAで誰かBでしよう」と言つた時に、ほとんどの人が「〇〇は誰が好きで誰が嫌い」という言い方をしたのよ。目の前でされるとよく判るんだけど、物理的な距離は外から見るとからすると簡単に「好き」「嫌い」に置き換えられてしまう。はめられてるんだと思った。

中川：あー。なるほどね。

竹田：言葉は悪いんですけど(第4回公演まで)飽きたんですよ。感情どうのこうの優先して行くのがもう飽きたきりや。つまなくて面倒くさかつたんですよ。

—— 疑問があつた？

竹田：疑問というか「嘘なんじゃん」って思いましたけど。まこれは演劇というものに失礼な話なんだけど。嘘モノを作るのに嘘の感情が入るよりも、状況とかルールで作るところからいって、お客さんに感情や読み取り方を委ねるのほうでしよう、と。

—— 確かに他のところでは見たことはいらないかな。状況が感情や何かを作っていく。

美弥子：bird's-eye-viewが似てると思います。

小原：うんうん。

—— うん。実際最初はそう思った。決定的に違う何かと決定的に似てる部分がある。

竹田：bird's-eye-viewはね、確かに影響を受けた中にありますよ。で、山の手帳情事があつて、斎藤がク・ナウキを持ってきて、それ全部混ぜて、で、ウチの出来ない事を排除していったら(笑)。ウチに似合わない部分を排除していったらこうなつたというのもあるんですよ。まずベタベタな部分で押そう。

中川：あーなるほどね。すごく判りやすいや。

竹田：bird's-eye-viewがツラネタなんてやらないですよ(笑)。

小原：やらないわー。あんなオシャレなところが。

竹田：そういやオシャレじゃない部分(笑)。

中川：我々特にオシャレ狙ってませんからね。

竹田：でク・ナウキからは芸術性でしょ。ウチは芸術性なんて求めやしないからそれも排除する。ウチは自分たちの提供するエンターテイメントしか出来ないんだから。

美弥子：『Performen』を続ける気はあつたの？

竹田：いや。

中川：なんで『武』やったの？え。なんかちよつとやめてよ「思いつかなかったからやってみました」みたいなのは(笑)。

竹田：「『Performen』でもやつてきますか」とか(笑)。僕がストーリーのある芝居に飽きたときますよ(笑)。

—— っ。

竹田：ただね、何にシステムが生きているかわからないんですよ。

美弥子：実験？

竹田：実験。たとえば何か普通にしていて疑問系に反応して頭懸る女がいたら。普通の芝居中なのに。そういうルールがあつて。戦う女がいたら面白いと思うよ。たとえば今までにやった本公演の芝居をもう一度やるとして、そういう制約だけ新しく削つて。

—— あー、違う芝居になりそうだね。

竹田：思うんですよ。

美弥子：多分他の芝居にもあるんですよ。そういうルール。

中川：そうだね。前面に押し出さないだけで。

竹田：で、そのルールをさらにシチュエーションにするんですよ。たとえば『劣情…』ではルービックキューブを一つのシチュエーションとしてしまふんですよ。いじらなきゃならない5人がいる。って言うルール。そういう前提をお客さんに見せた上で、そこを共有すれば笑えたり泣けたりする部分が増えるんですよ。

—— なるほど。

竹田：だから三本柱で考えて、「状況」「キャラクタ」「ルール」。

中川：ウチではその中でルールの比重が高いわけか。

竹田：そう。上げてきたから。最初の頃はなかったから。ストーリーとキャラクターだけで決めていたところを、状況、ストーリー、ルールみたいなものを最近加えてきた。

中川：これは普通じゃないところだね。本当は見えないで暗黙の了解みたいにしている部分をお客さんに有りきで見せるわけだから。

■お楽しみいただくにあつて

—— ではこの公演をご覧になるお客様に一言。

竹田：えーと。過去最高の『Performen』になるんじゃないでしょうかと。といっても今の段階で僕の頭の中には7割しか完成してないんですけど(笑)。

—— 役者に求める事は？

竹田：(時間を)巻けるところは巻いてください(笑)。

—— お客さんに求める事は？

竹田：面白くなくて笑ってください(笑)。

—— 自分に求める事は？

竹田：そろそろ人間ドック行つてください(笑)。

—— ま、どうせ終るでしょ？『Performen』。

竹田：僕の中では中世ヨーロッパの話にしようと思つてます(笑)。

小原：そんな俺出ざるを得ないじゃないですか。でも俺できない子だから。

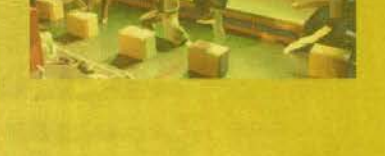
竹田：今回も嫌がってたからね。

—— じゃあ場所を変えてその話に行きますか(笑)。

於 某居酒屋田端駅前店
2005/12/09 23:40

残念ながら編集の都合上、こちらに掲載する事の出来なかつた部分もございませう。こちらに関しては後々WEB上などで公開する予定(時期未定)といたしますので、お待ちください。

劇団公式WEBSITE
<http://www.dna-system.com>



どうですか自分の劇団と比べて？
 裕之：そうですね、多少婦人は女の子がいっぱいなのでやりやすいです(笑)。電夏は男の方がとても多いので、非常に緊張していますね。
 — なんで？
 裕之：と！あえず(多少婦人では)スポンを脱がされることはないですね(笑)。もうね、(稽古場での)悪ノリがひどい！この「電夏は！もうホントねえ、イジメじやねえか」って感じですよ。
 — 『Performer』は見たことあるんだっけ。
 裕之：『巻』も『武』も観てますね。電夏さんは第3回公演からずっと観たので、お声がかかってお礼がたい話です。
 — どうですかやってみて。
 裕之：そうですね、とても面白いですが、システムの芝居はとても面白いので、役どころ的には？父はどんな人ですかね。
 裕之：父はですね…「卑屈なあらがれ」ですかね。なんていうんでしょうね。
 — 『Performer』はなんていうんでしょうね。リストラされた父が。
 裕之：そうですね。僕の感じでは卑屈な戦い(笑)なんです。正確には「卑屈で勇敢な戦い」か？
 — ああ、なるほどね、『巻』『武』では世の中曲げることがメインで、これでどうだ！みたいなね。
 裕之：戦ってるんですよ、『巻』に関しては、
 — ずいぶん戦ってるよね、これはどうしてだろう。
 裕之：セガシの成長とともにあり、って感じかな。セガシの年齢がちよっとずつ上がってるんですよ。それに伴い「オヤジの背中を見せちゃろう」的な部分があるんじゃないかな。挑戦的なんです。セガシに対して。
 — そうだね、『巻』で父は世界を歪めて『武』ではものすごく挑発する。それぞれスタンスが違うね。

はづき：前に比べてやっていくにつれて、稽古に対する自分のやり方みたいなものがちよっとずつ見えってきた気がします。参加する劇団によって違うんですけど、結構なんか前回から、すくなく自分の役に対して集中して考えるようになって、他の余計なことはあまり考えなくなりましたね。いろんな雑念でいうか。
 — やるべき事に集中できるようになってきたってこと？
 はづき：あと人数が多い時に自分の出ているシーンの(稽古)とかどうしたらいいかとか。そうですねやるべき事と時間の活用法をちよっとずつ。発見できてきたかなあと。
 — 今年は舞台が多かった？
 はづき：いやあそうでもないですよ。夏はやらなくてガンと空きましたからね。
 — その分後半から10月、12月、1月、4月？6ヶ月間で本が出ることになるけど。



■片桐はづき

はづき：そうですね、でも道井さんとかが(回数)やるから、あんまり自分がいっぱいやってる気があんまりない(笑)。結構ギリギリじゃないって感じるじゃないですか。薄村さんとか、それを思うとまだ行けるんじゃないかと。別に行きたいとか言うわけじゃないんですけど(笑)。
 — どうですか？年前に見たものの縮小に今度は自分が出る。
 はづき：どうですかね。あーでもやっぱり別物ですからね結構。自分の中で、新作的な感じで、アヒンに出てるっていうの。ね。役者さんも違うし。
 — どうですか？今回、普通なストーリーがあるものとはちよっと違いますが。
 はづき：結構私は今回も、いちおうその「セガシ」っていう(固定した)持ち役があるから、あまり自分的には違和感がないっていうか、「一つの流れがある」というのが(普段の公演と)変わらないうちで、でもいつもより動いているっていうのはありますけど。
 — 普段はダンスとかやってるの？
 はづき：そうですね。電夏でやっているとということが不思議っていうのはありますね(笑)。
 — 共演者とかは？
 はづき：前回とか前出てる人は頼りになるというか、色々(当時の)話も聞けるし、お話自体の解釈も聞けるし、っていうのはありますね。でもそれだけじゃなくて初めてやる人としてやるのも楽しいですね。
 — 「父」役のナベタさんは「凄くやりやめ」って言ってましたけど。
 はづき：ほんとかなあ(笑)。なんかナベタさんね判んないの(笑)。なんだらうな凄く優しいんですよ。凄く合わせてくれるの基本的に。

裕之：違うんですよ、両極端なんです。「巻」の父がまさに「父親像」で、『武』の父親は対照的で、あれ全く父親らしくない父親だと思うんですよ。そう考えるとどこに行けばいいのかわかって、難しいですよ非常に。そういう意味では『巻』『武』との戦いかもしれません。セガシとの戦いよりも(笑)。
 — こういう連続ものは必ずそういうところあるからね。又『巻』セガシと絡んでみてはどう？
 裕之：『巻』『武』に比べて「純粋」かな、と思う。「巻』『武』ともどこかウケのあるセガシでしたしね(笑)。
 — 今回は特にしっかりした殺陣指導も入り。
 裕之：師範級の強烈なコンビが(笑)。
 — 今まで(大学の劇団でも)自分で体動かすのが好きでやってきた事に、ちゃんと上から教えてくれるプロの人がつくるとまた違うよね。
 裕之：はづきさんもちゃんと教えてくれたり。なんだか(彼女のほうが)年下なのに自分のほうが強弱低く、
 — はははは、さて、今回の見どころを教えてください。
 裕之：そりゃあもう、ラストの5分近くは渡るなげなげ一戦大戦闘が、
 — 観陣のシーンね。
 裕之：その大戦闘のあとに果たして清谷が回るのか(笑)。
 — そっち(笑)！息があっちゃって大変だ。
 裕之：カミカミですよ。
 — 今回公演が新宿ですが、新宿のどこかオススメスポットは？
 裕之：新宿の「吉野家の焼鳥(笑)」
 — 前の仕事を引きそらない！
 — ※裕之君は学生時代、ずうっと吉野家でバイトしていました。
 裕之：西新宿のほうにあるんですけど。
 — 店舗で遊ぶの(笑)！じゃあ来年の抱負は？
 裕之：抱負があ…えーと、(中国)に行きたいです。前々から中国に行きたいと言っていたんですよ。あー竹田さんが気を使ってこの公演に呼んでくれたのかな(笑)。「中国気分」に浸れようお前！みたいな。ま、中国語を勉強しておきます。



■渡辺裕之

— ナベタさんは「(自分のほうが)年上なのに凄くリードしてもらってる」って。
 はづき：なんかお芝居の事以外でも、そうですね優しいですよ色んな意味で。だから、うーん、なんだろうな。(ナベタ)に結構相手の顔色伺いますよね。だから「あ、今合わせたなコイツ」みたいなのが凄く判るの(笑)。そういう時になんか「あ、気を使ってるのかな」じゃないけど。
 — オトサダ。「合わせる奴」と「合わせる奴に気づく奴」。
 はづき：(笑)でもやりにくい事はないですね。私、色々意見交換したいタイプなので、もっとガラン死んでほしいなあと思ってます。
 — 公演の見どころをサックッと。
 はづき：私的には舞台セットが楽しみですね。
 — あー(笑)。稽古場がどんどん狭くなっていくこの舞台装置(笑)。
 はづき：そう、『武』の時もビデオ見たら、自分が覚えていたより「ああこんなに美しい舞台だったかなあ」って思ったので、うん、だからとても楽しみですね。
 — 今回の公演は新宿なんですけど、思い出さススメなところ。
 はづき：新宿あんまりわかんないな…新宿？やっぱりお芝居を見に行くことが多い。
 — 劇場っぽいあるしね。
 はづき：そうですね。お客さんも行きやすい場所だし。
 — 来年の抱負は？
 中川：(は)。(笑)。抱負もクソもないですよ来年すく芝居なんだから。
 はづき：あ、そうですね。すくって言うかなんかもう年の境目がないですよねむしろ。なんか昔は一大イベントだったと思うんですよ。大晦日と正月って。でもなんかだんだん、なんか流れ流れてみたいな感じ。一年は短いすよ(笑)。お芝居4、5本やったらあつという間に終わっちゃうから。本当に早いなあ、って言うのがあって。
 — そうだね。
 はづき：来年の抱負あ…来年の抱負。来年の抱負。なんかもう一歩、進みたいですね。年金が払えるようになるのか(笑)。なんかそういう「1人暮らしをするとか。免許は取ったんですけど。それなんかちょっと「一歩進んだ」っていう。なんか保険に入るとか、そういうなんか、なんだ？社会に順応したい(笑)。

— さて『Performer』では必ず「巻き込まれる近所のおトナ」の役ですよ。
 小原：そうですね。やっぱりね、前の2回はどうしても消化しきれないでやってた。自分の中で、なかなか突き詰められてないんです。動きとか。だから今回はそこを出るだけしっかりやってやろうと、マイムを習ったりしてみたいし。ちゃんとやりたい。
 — 最近の私生活について。前は食生活の話をしてたよね。
 小原：相変わらず納豆は食べてますね。
 — そうだね、納豆とヨーグルトの話をしていた気がするよ。発酵食品。
 小原：ラーメン屋で深夜にバイトしてると、陣いで深夜にラーメンを食べざるをえないんですよ。
 — そうだよな。
 小原：でもそれじゃ体に悪いってんで、明らかにヤバいと思いついて、選3のバイトのうち1回だけラーメンにしておいて。あとは納豆をラーメンに持ち込んでます。で二飯もらって。そうそうそう。
 — あと来年はサッカーがね。
 小原：そうだフットサルやってんですよ。
 — あーそうだね。
 小原：フットサルやってるとね、いかに自分が走れないか判るんですよ。んで『Performer』にもつながるんだけど、稽古場に来る時に家から駅までと駅から稽古場まで、とどこか走ってるんですよ。(稽古中の)ウォーミングアップも必要ないんです。だから皆がやってるゲームは手を抜いてます(笑)。
 — 抜く(笑)！さて、今回の見どころを教えてください。
 小原：ジョーネで培ったチカラが発揮できると思われる「チェアマン」ですね。面白いと思います。ダメダメぶっ崩りも含めて面白いと思います。
 — 新宿の思い出、オススメなところ。
 小原：新宿ですか、ジョーネの九月の回の時に新宿で打ち上げをやり、財布をなくしてしまっ…それが最近の思い出かな。
 — 中川さんも財布なくしたよね、呪われてるな。
 小原：そうですね。アレで8千円くらいなくなっただから。そのあたりからね、俺すっごいガクガクって金銭が出て行くんですよ。やっぱり財布は大事ですよ。ちゃんと持ってないとどんどん出て行きますよ。
 — 来年は？
 小原：来年は『FRO』が前作に引き続き公開されるので、1月から撮影始まります。一体感があるのでガッツリやって。あとは5月のグリーンですね。

■小原雄平



中川崇宏



— 中川さんと張楽するのには本当に久しぶりなんです(笑)。
 中川: ま公演の度にしているんですけどね(笑)。
 — 本公演の時必ずしてますからね。どうですかこんなキャラ。
 中川: いやいや(バツプの)コーナーの時だけじゃん!
 — では本題に。シリーズでは中川さんは『(第9回) Performer』で参加したわけですか。
 中川: 『Performer』だけは参加してなかったんですけど。電夏で唯一。
 — どうですか『武』と比べて。
 中川: もらったじゃないですか『武』のDM。で観たじゃない。でねあのね、わりとカッチリしてた事にびっくりしたよ『武』。『武』は(斎藤)ミルクがいたからカッチリしてたじゃない。で『武』は俺が戻ってきてミルクがいなかったでしょ。酒巻とかいけど、わりとカッチリ感はないかなと思ってたんですよ。
 — もっと緩やかな感じ。
 中川: そう。それでも映像で見るとかなりカッチリしてたのね。だからねこれプレッシャーですよ『参』。レギュラーメンバー以外が変わるじゃない。だからね、それによってその基本軸がどう変わっていくかという。
 — そうだね。
 中川: やっぱ変えちゃいけない所もあるわけじゃない、シリーズとして。
 — なるほど『武』と『参』と続いていると確実に「これがPerformerだ」みたいなものがあるわけだ。
 中川: そういう意味で『参』でちゃんとつながっていくのかという。これはですね一ままだまだ頑張りたいですね。大変ですよもう。
 — それと面白いのが『武』『参』ともに凄く体の動きが出来るのね。
 中川: そうね。ほら『参』はさあ、アレじゃないですか。メンツが誰もユニークじゃないですか(爆笑)。
 — ユニーク、ね(爆笑)。
 中川: 今かなり俺の辞書の中から持ってきましたね。一生懸命探して「どんな言葉当てはめりゃいいんだこイツラは」って。
 — 「ゆにく」。独特。
 中川: なんかね、良くも悪くもなんか化学変化を起こすので、それがどう観ても思えるか気になるところですね。まあ後は「まだまだ体ジメないと」思っていますね。

— いかがですか、『Performer』ですよ。
 道井: 『Performer』はね、稽古のほうが大変。本番のほうが楽っていうイメージがある。地味なんだけどね体に負担のかかるあの動き。稽古だと延々とやらなきゃいけないんですよ。それが本番だと一回で済むんだから(笑)。だからいつも本番が終わると、「まだいけるぞ」みたいな(笑)。錯覚に陥る。あ、そういうばですね。『Performer』やる時って必ず(テレビ朝日の)「TRICK」やっているんですよ。
 — そういえば今年もありましたね。思い浮かばなかった。
 道井: あれはね、『武』の時も『参』のときもそうでしたわ。
 — ああ。でも道井さん見られるんですか?
 道井: 僕らね、ほとんど見られませんが。
 — ですよ(笑)。日常的な話題だからつい喋っちゃったけど。
 道井: そういえば今撮影中の映像作品の話ですね。こないだ出演者の都合もあってイェローキャブの人と会ってきたわけですよ。でその時にテラス渡して。そしたら「1日3回ですか。ジャニーズじゃないですか。」と、やっぱり言われた(笑)。
 — あっはっはっは。やっぱね。業界で333まで以上って言うところなんだね。
 道井: そうそうそう(笑)。「ジャニーズが電夏ですよ」って言うておいて。
 — 1日3回公演には慣れた?
 道井: 慣れました。慣れましたけど、3日以上続くことこれ問題ですね。今回は終わったもう即帰ります(笑)。
 — まあ今回新宿だしね。
 道井: そうですね。今迄で僕にとっで一審しい帰郷じゃないですかね。
 — ある意味ホームグラウンドで。
 道井: (ジョーネを毎月開催している)世環より着くの早いですよ多分。乗換えがないので。一番楽です今まで。

渡辺美弥子



— さて『Performer』に『武』『参』と出ている最古参ですが。
 美弥子: いやーまさか『参』まであるとは思ってなかったの。
 — 初代セガレから見て今回の『参』はどうですか?
 美弥子: 今回は…いや全部『武』『参』やっぱりやる人によって、たとえば同じセリフとかもあるんですけど、言わんとする事は一緒なんだけれどもやる人によってその空気が変わるから面白いなあって思っています。世界観が微妙に変わってくるのが「おーなるほどなあ」みたいな感じがありますね。それが役者の持っているものでしょうね。
 — 客演は『Performer』初ですが、その辺り他の公演と何か。
 美弥子: いやあ何も変わらないかな。細かるところの違いは最初あるんですけど、やっていくうちに皆作品の独特な感じを掴んでいっているように思います。
 — 最古参ならではのところで、『武』『参』のセガレの趣意を。
 美弥子: 一難しいなあ。私がやっていた『武』の頃のセガレは見ると本当に「狂言回し」みたいな位だったなあと思うんですよ。あまり人間味がなくて、言われたことに対してあまり感情もむき出しになかったし。お父さんの一言一言に対して喜んでたり怒ったりというのがそんなに無かったなあと。場面場面が突きつけられるものは一緒なんですけど、単純な感じだったなあと、自分でやってたのは。狂言回しとして(意識して)、『武』の阿部さんの時でグンと人間味が増して。そしてづきもセガレの持っている感情、喜怒哀楽がベースにあるんだなあと。あ、そういうやり方もあるなって思っていますね。
 — なんだらう。狂言回しからキャラクターになってきたのね。役だったものに色々々なものも重なって。
 美弥子: そうですね。一人の人間として。
 — 今回の役どころは?
 美弥子: 自分の役どころは「コマ」ですね。人に翻弄されつつ人を翻弄しつつ。人の、普段は見られない滑稽な場面を見せてきた。無様なところを。会社とかじゃ見られないような。バイト先や聞けないような声を聞いたり。非日常的な滑稽さを表現できたなら最高です。

— 今回の公演の見どころは?
 中川: アレじゃないですか。たぶん何度観ても回数観れば観るほどに味が変わる作品だと思うんですけどね『Performer』。なんて言うんですけどね。現実の拡大解釈という妄想力の勝負というか。
 — 回が変わることにお客さんの妄想も変わっていくというか。
 中川: そうだね。だからね柔軟な頭でですね、話の筋をキッチリと理解しようとするより、なんか世の中の仕組みを一緒にありえないくらいの子力であ妄想してみようよという。ふうな見方をしてくれたほうが、より楽しめるのではないかと。
 — これまたどういったエンタビュじゃね?
 中川: 今回僕ね、あんま今までほど下ネタ的なセリフが無いんですよ。
 — わりと話を回すというか。
 中川: そうね。ただなしおさんが4時の時は思う存分インジリ倒してますけどね。そこ見所っちゃ見所ですね。なしおを(舞台中)言い表す単語を今いろいろ考えているんですよ。なかなか無くて。昨日は「パー(ひい)」と呼んでみたんですけどね(笑)。「このパー(ひい)!!」って(爆笑)。
 — あっはっはっは!! 面白いなアングラ語彙が多すぎ(笑)。
 中川: この前はね『この運命師がっ!』で(笑)。なかなかね、インパクトとね、こう聞いた瞬間にイメージが広がるのが両方ある言葉を探しているんですよ。
 — 公演が終わったら何がしたい?
 中川: えーっと年越しソバの準備をしますね!
 — (笑)まだ4〜5日あるよ。
 中川: 何言ってるんですか。水からソバ物から全部調達してきますよ。4日あっても足りないですよ(笑)。
 — 新宿でお勧め、思い出のスポットは何処ですか?
 中川: えー、昔新宿駅の東口改札で当時の彼女に指輪を遺した時に、いきなり顔に投げつけられました。
 — マジ?
 中川: いやもうマジなんですけど、俺はその子の事より俺の顔にぶつかって改札を転がっていた指輪のほうに意識が行っちゃって。「アレ何処行くの」みたいな(笑)。

道井良樹



— 新宿でオススメの店とか。
 道井: あ一僕のオススメは南国ですからね(笑)。どこだろうな。あ、僕バイト先新宿なんですよ。何処でも行っちゃいますよ。僕がよく行くのはですね、この劇場「モリエール」の向かいにあるマンガ喫茶。ソコよく行くんですよ。モリエールの本当はすむかい位にあつて、ソコよくお気に入り、椅子がリクアインングだけじゃないんですよ。フラットシートで書いて、寝返りが打てるくらいフワフワの平場もあるんですよ。だからソコで仮眠取ったり、ソコはもうお茶も変えよう。
 — いくらくらい?
 道井: 男性はね1時間3〜400円くらいかな?3時間パックで800円台だと思う。プランケット借りてゴロンとしてられるし。まあ携帯は充電して。起きたらシャワー浴びて。シャワーも無料なんです。トイレはウォッシュレットだしね。
 — さて、『Performer』の見どころを教えてください。
 道井: これはね、いっぱいありますよ。たとえばね。舞台も作りこむことが多い。奇跡な動き。ダンスでもない。芝居芝居でもない。(人)に聞かれていつも困るんですよ。普通の芝居でもダンスでもない。役の数だけ延べにしたら100役くらい出てきますからね。それを全部12人でやりますよ。これも見どころの一つかもしれないしね。あとは「フルーツ(ケット)とか、椅子取りゲームのシーンなんかも、お客さんにとっては印象深いと思うんですよ。
 — こうしてみたい、とかは?
 道井: 絶対負けない(笑)!本気で椅子を狙いにいきます僕は。
 — あとね、これももうクリスマスなんですよ。道井さんクリスマスの思い出なんかありますか?
 道井: クリスマス…僕あんまりねクリスマスとか運体たとかにとっても無頓着。どちらかと言うと僕は正月派だからね。クリスマスだからって事は特になんか。プレゼントとかも「普段からやればいいじゃん」って思うんですよ。イルミネーションとか見てキレイだかと思わない?
 道井: 思いますよ。思いますけど、わざわざ見に行くような事思わないです。通った時にあれ(笑)です。
 — 道井さんにはクリスマスに公演があるのがあんまり関係ないやな。「今日はバイト入ってる人数が少ねえな」程度?
 道井: そうそう。そんな感じ。あーバイトしてるわ大抵そういう時は(笑)。

美弥子: 最近はずっと、12月に入ってから全くバイトを入れてなくて。もう今からすごく怖いですが、あーどうなっちゃうんだらう。
 — 来月どうやって暮らすんだらうって?
 美弥子: そうそう。でもまあ多分死なないだろうな。死にやあしない。
 — そういって前回は『武』の学童で「体流して洗うね」とありましたが、これは相変わらず?
 美弥子: いやいやいやアレは、アレですよ。田中さんの勝手に書いたんですよ(笑)。
 — ーい、やあ、観た人みんな驚いて聞いてくるんだよね「アレ本当?」って。
 美弥子: 驚きますか。そうが。でもね。あんまり細かく説明しちゃうと結構滑り引いちゃうから、ちゃん入っていることにしてください(笑)。
 — はははは。
 美弥子: まーた、連チャンで銭湯とか行くのは私にとっで最高の贅沢ですけど。
 — 風呂が無い家で、連日銭湯に行くのが贅沢ってことは…
 美弥子: 後はご想像にお任せします(笑)。
 — さてと、今回の芝居の見どころを教えてください。
 美弥子: そうですね。うん、体を使ってるというのがあって、ただそれだけではなくて、その内劇2コマの部分がちゃんと織り交ぜられている。「身体」と「滑稽さ」この融合したところが観られる。これが面白いんじゃないですかね。なかなかいいものを作っていると思います。
 — 今回の公演新宿なんですよ。何か思い出のスポットやおススメなありますか?
 美弥子: 新宿の南口でよく路上パフォーマンスをしていて。南口を出たところに宝くじ売り場があるんですけど、あそこのおばちゃんとか仲がいいです。いつもね、パフォーマンスできるように場所空けてくれるんですよ。「おはよう」って言って。
 — 来年の抱負は?
 美弥子: いかにもバイトをしないで生きていくんですけど。もう今年はずっとね、結構普通に(アルバイト)働いたんですよ。でも本当にバツリしたくないんですよ。いやいやいやいやいやいやいやいやいや。ただアルバイトで時間が取られちゃうことが本当に欲しい。うん、だから今回の公演はその点で一番時間を割きました。で来年はもっともっとこう、(バイトを)減らしたい。何かいい方法は無いですかね。芝居で飯を食っていき。そうですねそれが一番いい。

渡辺 智行

— 今回の『Perfume』という作品は過去二作のバージョンアップみたいなものなだけ、前は見たことあるのかな。

智行：ええ、実は電動椅子を初めて見たのが『武』なんです。

— その公演のあとから、舞台に出るようになってるかな。

智行：そうだね。ビックリっていう感じですね。

— どうだろう、見た時とやってみての現在とでは。

智行：出させてもらうことになって、今は難しさに驚いているというか。

— 何が一番大変?

智行：なんかオムニバスみたいで、いろんな役柄を要求されるじゃないですか。まあ、自分なりに考えてやるように、人にも言われませんが「最初は勢いでやってても、どこかでちゃんと意思を持っていかない」とみたいな。今回そういうようにやろうと思っていて、もらったセリフや役柄に対して「こうやってみよう」と、…これが難しい。役多めの(笑)。

— 一芝居だけの役柄なら良いけど、大変だね。

智行：そうなんです。だから何歳とかどんな奴とか一つ一つにワクをつけて考えてみたり。そこから考えてみようかなって。

— お気に入り?

智行：(FLOWER)の「母」ですね(笑)。アレは…もう大好きですね。あの役はやって面白いですね。竹田さん自分の性癖を見抜いてるのになって。

— 性癖? どんな? モコモコ突っ込む(笑)。

智行：えー。Mツメ。自分DMツメ。それに自分ド変態ですから。そりゃ否めないう。

— そういえば(舞台監督) 大道具の作業中そんな話ばかりするって。男子校のエロ中学生みたいって。

智行：もう自信を持って言えますね。自分変態ツメ(笑)。まあ電夏ではまだすごいネコ被ってますけど。たぶん派手を出したらドン引きすると思えます。特にばづきなんてもう口きいてくれないうつ。今それだけでなくめちゃ(笑)の(笑)。

— どのへんがM?

智行：精神性ですね。叩かれたりとかは嫌なんですけど、辱められるとか(笑)。ナベヲにも同じ匂いを感じますけどね。あーあと澤村君ですね。

— DSは?

智行：チュンさん(中川)ですね。

— この劇中で性癖の変な奴しか集まってないの(笑)。

智行：いやこれは俺の持論なんですけど、若絶対そういるのがあると思うんですよ。見える人は正直なんです。芝居やってる人ってもっとなんかアレです。自分を持ってから自信を持って開放しちゃってるんですよ。かなり都合の良いほうに考えてますけど(笑)。

— 新宿のお勧めスポットを教えてください。

智行：最近全然行ってないんですけど、自分アイリッシュのバブが好きで、ダブリナズがありますね。

— ライオンの2階ね。あるある。

智行：いや(笑)で1人でも行けるんで、ていうか1人でしか行けないんですよ友達いないんで、あーじゃあ飲み友達募集! なるべく女性。男性でも。問わず。ついでに彼女募集とか入れておいて。

— あーそれは人(笑)だね。

智行：あーもうですね…。

— 徳兵衛集めにしますかね。では次、公演終わった後何をしたい?

智行：月見みですけど(スノー) ボードに行きたいですね。シーズンですからね。後はただ遊びたいですね。



— そういえば前回公演をご覧になった人はご存知かも知れど、前回のバージョンで「精古場で悪く食べている人」ということでネタになっていたね。

小泉：そう、この前ナベヲ君に、今回初めて一緒にやるんですけど、「本当にいつも何か食べてるんでね」って言われて(笑)。今回私づくにそんなに食べてないと思ってるから。

— ははははは。

小泉：いつもなんか食べてると思われて「本当にそうなんだ」とか言われて。あたしのほうがビックリしちゃったんだけど。かなり控えめなんだけどな。

— 今のお気に入りは何ですか? この冬オススメ。

小泉：お気に入り…オススメ…は、「アポカド」。アポカドが大ブーム。私の中で、毎日食べてる。毎日買ってます。

— おれ熱してるやつ選ぶの大変じゃない?

小泉：そーもうすごい選んですごい色とか見て。触ってね。

— どうやって食べるの?

小泉：だいたい輪切りにしてワザビ醤油で食べたりとか、あと最近流行ってるのは自分の中でね。あー。アポカドをザクザクと切って納豆と混ぜて、で、お豆腐もザクザクと切って、んでご飯の上にお豆腐のつけて、(アポカドと)納豆のつけて、ちょっと醤油バツとつけて食べるの。

— ほう。それは自分で考えたの?

小泉：うん! 面倒くさいから全部一緒に食べちゃって(笑)。でもそしたら意外とそれ美味しかったのね。結構ヘルシーだし、値段も安く上がるし。ぜひ試してください。

— 精古場で豆腐ばかり食べてるナベヲに教えてあげたいね。

小泉：あと最近是不眠症なんです(笑)。寝れないのー。

— それで…。

小泉：そう。台本すごい読んでますよー。読んでるそばから抜けてくけど(笑)。台本もガツくらい。すごい一緒にいますね。

— こないだ「台本読もつかぬ」ってメールが来たのが深夜の2:30だったね。あー全然寝れないんだ。

小泉：そうなんかいっつも…ってやめよう。この話。なんか病的(笑)。

— さてさて、どうですか。今回の芝居は体を動かすのがとても多いですが。

小泉：うん。でも最近になって体を動かした始めたんで。

— 現在2/10。あと公開…アレ?

— 一昨日くらい(笑)。それまではね。ほら。動いてもあまり体を激しくじゃなくって。まあ大変っちゃあ大変だけど、でもその前に出てた劇団のほうももっと大変だったからね。もう動きっぱなしだったから。考えてみたら。

— あー。そうですね。そんなでもないのか。さて今回の見所は?

小泉：えー。所張ってるところ…。頑張ってるよー全てにおいて。もうイッパイイッパイ(笑)。なんだろう多分今回は役でほぼ役が固定されてないから(劇)に出た舞台とはまた違うんだろうけど、全編通して私が一番普通の人だと思うんですよ。クセの強い人(劇)たちがいっばい出てくる中で、私がわりかし一番普通の人になって。一番お客さんの視点に近い人だと思うんで、私を見てればそのまま私の視点で見られる? あらオトク、めたいな。あはははは。

— さて今回の公演は新宿なんですけど、新宿のおススメスポットを教えてください。

小泉：私は、TAITO STATION というゲーセンによくいきます(笑)。南口を降りたところの劇場が近く。あそこ一時期メダルが安くストックされたのね。今は精古場で安くもなっちゃってもうなくなっちゃったけど。後は…新宿の劇場(モリエール)の近くにある「らんぶる」っていう喫茶店。昔からあるとこ。よく行きますね。

— 来年の抱負など。あったら教えてください。

小泉：鬼が笑うよー。

— まああと1ヶ月も無いし。

小泉：そうだなあ。…今年抱負は何だったっけかな。って今考えて(笑)。まあノンビリと、自分を楽しむ。

小泉めぐみ



澤村 一博



— あー。天一事件というのがあったようで(笑)。

澤村：いやいやいやいやいや(笑)。あのねえ、あれね。多少ね。竹田さんも誇張しますからね。

— ま、まあ面白く解釈しますからね。

中川：誇張しな(笑)ええよ。『おヒレ』って言われるくらいだから。

澤村：やなニックネームですね(笑)。アーいや確かにね。あの、酒が入ってたって言うのもありますから。まあ、酒が入ってて、カラオケいってね。竹田さんと、(大)鹿ちゃんと、村上さんとね。で小泉もすいたので、ラーメン食おうって。あそう言えば最近天一(ラーメン屋の『天下第一品』)で食べてええなって。でカラオケボックス出たら、村上さんと鹿ちゃんは既いなくて。竹田さんに聞きますよーね「あれー2人どうしたんですか?」「えーもう帰ったよ? 澤村なんか持ってるんねえって言って。」って。

— えーそんな事言っていないよ(笑)。

澤村：ウーン流石ですね。おヒレ(笑)。

中川：(竹田)絶対そう言うね。想像が容易につくもん。

澤村：で、あーいけふくろうのあたりまで行って、で「竹田さん、僕ラーメン食いにいきますけど行きますか? あのねえ、西口に天一があっつね。そこ行こうと思うんですよ。」って。そしたら「行きませんよ。」って。「じゃお疲れ様でした。」って。それで終わりなんです。

— 俺が聞いた話じゃ天一が澤村君のイザシの旨い店になってたそうだけど(笑)。いやー僕うまいラーメンの店知ってるんですよ「天一」って言うんですけどねーって。で竹田さんは「天一は何処にもあるだろう」って思って断ったって。

澤村：しかもこの内容、ちょっと台本に反映されてるみたいなんです(笑)。

— ね、うまく芝居の筋と、さて今回はどうですか?

澤村：そうですね。着段の電夏やってる事と違いますが、こころろシーンが入れ替わるというのは僕、前にやってたんで。それにに関しては苦手意識は無いんですけど。一番大変なのは「体を使う」っていうことですね。今までごまかしつつやってきて、喋りだけでやってきていたので、弱い所が全部出た(笑)。

— けはあ、もうゴマカシはきかないぞ。

澤村：きかえぞ、と(笑)。やーでも回りに迷惑かけばなしですね。

— 今回の見所を教えてください。

澤村：見どころ…見どころ…これ何も出てこないのはまずいな。見どころ…あ、甘噛み(爆笑)。甘噛みは重要なキーワードですね。そうですね甘噛みくらいじゃないですか(笑)?

— 「くらい」っていつか? それしか見どころないの?

澤村：いやいやいややそういうつもりじゃあ。でも僕はこれでも本公演(回)目、1回目・2回目はシチュエーションコメディでしたけれども、ま今回こういって形式の舞台なんで、最近見始めた人は「あーこんなこともやるんだ」って、お客さんの感性を楽しんでいただけたらいいなと思います。

— 今回の公演は新宿なんですけど、新宿で何かオススメのスポットとありますか?

澤村：新宿に天一ってありますか(笑)。

— あっははははは!

澤村：新宿はねえ僕アレなんです。アウェイなんです。…新宿の天一っていばねえ。

中川：ありますよ(笑)。

澤村：新宿は僕あまり攻め込まないでねえ。

— 精古場からコマ劇に向かって入ったところさ。

澤村：あー! ありますあります! はい、オススメ天一で(笑)。

— それでは最後に来年の抱負を。

澤村：来年抱負ですか。来年20歳か。バチンコで300万円…いやいやそんな抱負もねえな。「幸せになります」と。

片桐：結婚!

澤村：よし、じゃあ結婚します。

— 誰と?

智行：ばづき結婚してあげなよ。

片桐：……………はあー。

■ なしお成



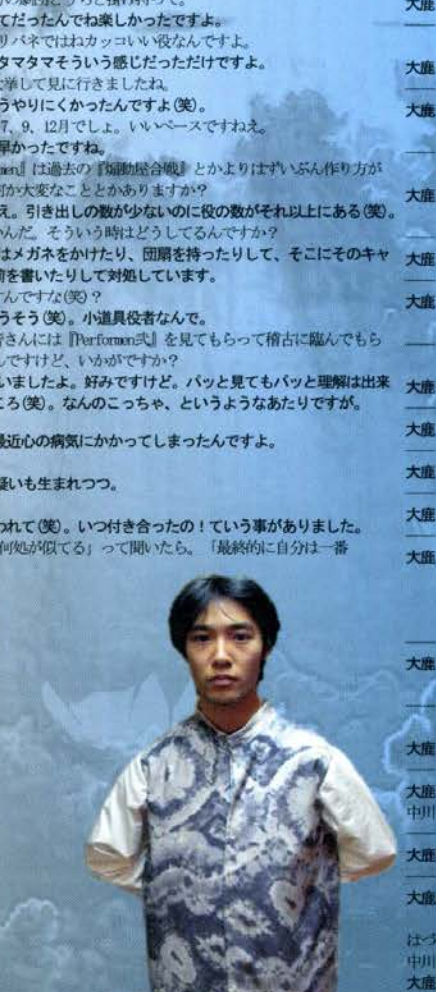
—— 今年3月に出たいてからもう1年間、お世話になっています。いかがですか自分の進捗どうと聞き掛ります。
なしお：客演が切れてしまったのでね楽しかったですよ。
道井：なしおさんカリパネではねカッコイロ役なんですよ。
なしお：こないだがタマタマそういう感じだったんですけど。
—— 電夏の間が大挙して見に行きましたね。
なしお：そうそうそうやりにくかったですよ(笑)。
—— それが9月で、7、9、12月でしょ。いいペースですね。
なしお：今年一年は早かったですよ。
—— 今回の『Performer』は過去の『福助屋合戦』とかよりはずいぶん作り方が違いますか。何か大変なこととかありますか？
なしお：そうですね。引き出しの数が少ないのに役の数がそれ以上にある(笑)。
—— 引き出し少ないんだ。そういう時はどうしてるんですか？
なしお：そういう時はメガネをかかけたり、団扇を持ったりして、そこにそのキャラクターの名前を書いたりして対処しています。
—— 小物で認識化すんですか(笑)？
なしお：そうそうそう(笑)。小道具役者なんです。
—— さて、客演の皆さんには『Performer』を見てもらって稽古に臨んでもらったりしてるんですけど、いかがですか？
なしお：面白かったですよ。好きですけど、パッと見てもパッと理解は出来ないようなところ(笑)。なんのこっちゃ、というようあたりですが。
—— 最近上手している中川さんとの仲について。
なしお：中川さん？(爆笑)あーあーあー。中川さんですが、最近心の病気にかかってしまったんですよ。
—— 暇さえあれば(なしおの役の)名前を呼んでいる、みたいな。
なしお：そうですね。ちょっとした病気なんじゃないかと。私の中の疑いも生まれつつ。
—— 軽くロマンス剧ですね(笑)。肌をなめますね。
なしお：そうそう(笑)。『OM! Award!』の時も突然「別れよう」って言われて(笑)。いつ付き合ったの！という事がありました。
—— その中が対。 (なしお)竹田に似ているというんですよ。で「何処が似てる」って聞いたら、「最終的に自分は一番傷つかなければいいじゃないかとしようとするところ」だっただけ(笑)。
なしお：そうですね(笑)。美味しくないとそこには絶対行かない。
—— 今回の見どころについて教えてください。
なしお：ラストシーンじゃないですかね。「セガレ」の言っている事がお客さんにちゃんと伝わりさえすれば、それで充分なんじゃないかと思っちゃいますけど。
—— 新宿といえは？美味しいお店など教えてください。
なしお：南口でファーストキッチンほほうに行って、ちょっと奥まったところにある「赤レンガ」って言う店があるんですよ。ここは朝ごはんも安く。お昼が、ステーキが凄く大きくて、1,000円以内で食べられる。サーロインステーキなんですけど、結構早くなくなっちゃうらしいので。
—— 今回の公演は体を動かすことが多いと思うんですが。
なしお：全然苦にならないですよ。というか先に背に背されていたよりも、なんか予想よりは全然。なんかこう、人じゃないみたいになってしまふまでなるのかなと思っていたんですけど、そんなこともなく。
—— そういえばやせてって話が出てるんですが。
なしお：今ですか？
—— アイデンティティなくすぞって話のようだけど。
なしお：大丈夫ですよよっくらい減ったって増えたって。
—— アレで上正月になったらまた実家に帰ってうまいもん食うんですよ。
なしお：んーでもこの公演の前に一寸やせて、戻ったと思うんですけどね。戻ってない？
—— はい。着実に。
なしお：本当に！いそいそ。
—— あ、喜んでる。
なしお：しょうがないっすよね！アタシも女子なんです(笑)。こりゃね、女子として幸せになりたいよな。

—— 今回はお下劣デビューと噂に記載されてはいたしましたが？
高松：そうですね？ナベタマさんの影に隠れてますけど、実は下ネタ嫌いなんです。多分言ったことないんじゃないですかね。
—— うん。下ネタっていうかシモノキャラではあるんだけどね。
高松：(笑)そりゃどーゆー意味ですか。
—— そもそもなんであんなに下ネタを期待されたんですかね。
高松：なんででしょうねー。もともと台本の中でその後の部分でちょっとシモノなところがあるんですけど。一発目本当は「x x x」というところがあるんですけど、「そこもシモノばく行きましよう」みたいな。個人的にはとでもやりたくないんですけどねえ(笑)。テンションを異常に上げて、言った後に裏に下がる。
—— 無理してあげてるからね。



■ 高松亮

高松：あーでも今回いつもより真直ぐですよ。あの、ウオッチマン、やってる時にシャカシャカ動いてる時は物凄く真直ぐです。しゃがんでる時は意識できるんですよ。立ってる時は真直ぐだとは思ってるんですけどね。自分の中では曲がってないんですよ。背骨。
—— しゃがんでる時はキュンキュン動いてるもんなわ(笑)。



■ 大鹿順司

—— あれでねえ、シカちゃんお酒好きだけじゃ意外と弱いんじゃない？って話が出てきたんですよ。
中川前事：おつかいなんだよね。顔に出ないから認めないんですよ。片桐前事：うんおつかい。酔っ払ったシカちゃん見てみたい(笑)。
—— えーそれでは、今回の芝居の見どころを。
大鹿：んー、やっぱりその、コトワリというか、決められたルールの中で話が進む。何なんですかねえ。なんですか？ルールという不自由さが面白いんですよ。
—— 新宿の思い出や紹介を何か。
大鹿：なんだろうな。行かないですかね。田舎者なんで。あれですな新宿といえは『City Hunter』の伝言板ですよ。XYZ。
高松：そう無理してるからねえ(笑)。あそこの相方が皆行君なんですけど。あいつは本当、シモノタ魔人みたいな男ですからね。俺とは対照的な男ですよ。
—— 高松さんにとって3作目はなんですかね。
高松：役一なんですよ。トリメさんという役がありまして。役だけは変わらず3作出てるんですけど。「セガレ」は2歳ずつ年をとっているのに、トリメさんは10歳ずつ年をとって(笑)。今回トリメさんは老けています(笑)。今年で70歳の設定です。
—— どうしちゃったんだろうか(笑)。どうですか、トリメさんは。
高松：トリメさん、ねえ。あれなんですよ。最近ふと思ったんですけどね。トリメさんは別に何か特別なチカラ的なものを持ってないんですけど、ありやどうも「セガレ」をちよっと導く、みたいな役なんです(笑)。まあ口だけな男なんですけどね(笑)。実際にトリメさんが何か示してあげることはなくて、ただ口だけなんかで、八つ当たり的に何かを言うことで「セガレ」をちよっと導く、みたいな。昔のおっさんみたいな感じですよ。
—— 厄介な、何かに言ってるのかもしれないのに、それ聞いてる子供が意外にも成長しちゃう感じ。
高松：ええ、ええ。年取ってる人の言うことだから、と思っかけて、子供がなんか成長していくみたいな。そんなおっさんです(笑)。
—— 高松さん年寄りキャラ多い？
高松：おおいですねえ。
—— なんてだろうね。背骨？
高松：あーでも今回いつもより真直ぐですよ。あの、ウオッチマン、やってる時にシャカシャカ動いてる時は物凄く真直ぐです。しゃがんでる時は意識できるんですよ。立ってる時は真直ぐだとは思ってるんですけどね。自分の中では曲がってないんですよ。背骨。
—— しゃがんでる時はキュンキュン動いてるもんなわ(笑)。

—— 今年夏のワークショップを経て、唯一の初参加メンバーですが。
大鹿：出たかったんで、よかったです。
—— ワークショップをやった時に「あ、これ自分いけるな」とか思うところあった？
大鹿：いやもう全然。いや……っていうか……もう全然ダメだったね。
—— 声がかかるとは？
大鹿：本当に、むしろ諦めてましたから。そうですね全然もう本当に、ダメだと思いました。
—— 稽古中はどう？『Performer』は普通の芝居とスタイルが違うので、やっけて大変だったりと。
大鹿：そう……ですね。そんなに俺はこだわらないんで、コロコロ役が変わるのにはやっけてやらないでいいんですけど。
—— むしろ新鮮でやりがいがある位なのかな。
大鹿：やりがいにはありますね。
—— どのへんが一番面白かったですか？
大鹿：電夏役者さんはキャラで作っていくじゃないですか。道井さんと俺はそういう作り方を全然した事がないんですけど……面白いなと(笑)。
—— そういえば大鹿君、ここ(稽古場)に泊まってるそうだよ(笑)。どう？木材とか散らばって大変じゃない？
大鹿：えーいや、広くていいなあ(笑)。
—— そうか、今独り暮らしして六畳間。
大鹿：はい六畳間ですね。
—— そう考えると9割近くあるもんですよね。……しかしそれでもよく泊まるよな。
大鹿：いやーもうむしろ快適ですよ。
—— それと飲み会・澤村会も結構勤ね。
大鹿：あーお酒は好きなんです。
—— 『稽古場』『飲み会』とくると次は『おでん事件』が外せない(笑)。
大鹿：えー。ああ、いやいやいや。おでん事件はねー。何すかね。駅前までずんずん飲んで、泊まりながら稽古場へ帰る途中に、まあ最悪のセブンイレブンで、おでんを買ったわけですよ。まあ翌日、稽古場の電車の途中、にある踊り場。小原さんとここに。
—— あー小原ちゃん(笑)。
大鹿：そう小原ちゃんに「食いかけの何すかね。ちくわですかね。ちくわがあったんですよ。ちくわが……」
—— うーわー。シャカ(笑)。しかもあれだよ。おでんの具は3つくらい買ってたんだけど、1個目のちくわの半分くらいで残ってたんだよ(笑)。
大鹿：そうなんですよ。しかもなぜか手掴みで(笑)。
—— (笑)筆は？筆は？
大鹿：いや俺もちよっと覚えてないんですよ。
中川：だってこれも全部推測だもんね。シカちゃん全然覚えてないから(笑)。
—— 完全記憶にないの？
大鹿：ないんですよ。
—— 朝起きて皆のツッコミで笑った？
大鹿：そうなんですよ。レシートにこう、まあ、午前1時何分とか、俺しかいないっすもん。ははは……
はつき：あ、供述してる(笑)。取調にされてる。
中川：誰でも解けるミステリーだけどな。
大鹿：いや買ったところは覚えてるんですよ。
—— あ、覚えてるんだ。
大鹿：食ったところは覚えてないんですよ。
—— (一回大笑)

—— これは今回の見どころを。
高松：『Performer』はですね、最初と最後の殺陣(アクション)のシーンが好きなんです。ほとんど関わってないんですけど、僕は関わってないんですけど、そのシーンが好きですよ。やっけるところではチャーマンですね。頑張りますよ。新宿での思い出、オススメをいつ。
高松：新宿ではチェーン店に入っただけがないのでわかりませせん。あ、歌舞伎町に「神堂(かむくら)」というラーメン屋がありますね。そこオススメですよ。腹減るのほうでまだ店舗くらししか出てないんですよ。食うんだつたオススメです。こま割に向かっ歩いて、右側の天ー「天下一品」というラーメン(屋)の角を右に入ってます(笑)。
—— 最後は来年の抱負を。
高松：来年ジョーネもあるんですけど、まあ今年より楽しんで生きたいです。今年は身を削りすぎた感があるので、もうちょっとキチンと生きたいなと思います。

公演情報

DENDOH NATSUKO ANTI SYSTEM PERFORMANCE #013

電動夏子安置システム第13回公演



Performen参

【爸船皿】～父がうつわを襲っている～

Place シアターモリエール

Date 2005年12月23日(金)～26日(月)

■PERFORMANCE

渡辺美弥子 中川崇宏 道井良樹 小原雄平 高松亮 (電動夏子安置システム) / 片桐はづき / 澤村一博 / 小泉めぐみ
なしお成 (カリバネボタン) / 渡辺智行 (feel&move) / 大鹿順司 (劇団ポコポコ) / 渡辺裕之 (多少婦人)

■STAGE DESIGN

■脚本/導演: 竹田哲士 ■企画製作: 村上朋弘 ■音楽: 柳原正吾・渡辺純 ■音響操作: 古場田良子(明大劇研)
■照明: 岩田麻里(C.A.T) ■舞台監督/舞台美術: 佐藤貴之 ■宣伝美術: 煽動屋企画 ■映像: 村上朋弘
■ヘアメイク: 狩野智子 ■小道具: 米倉由美 ■衣裳デザイン: オフィスFLIP-TOP ■衣裳作成: 三田早紀子
■撮影: 荒多恵子 ■殺陣指導: 師範サ尾崎・師範ノ師範
■制作: 村上朋弘 濱本円 松平信雄 竹本哲也 市川裕子 西村知紗
■協力: 勝美印刷株式会社 明治大学演劇研究部 C.A.T 石井ゆり 久保佳子 佐藤綾香 森綾子 森野温子 (順不同・敬称略)

本公演『Performen参』が、スカパー！演劇番組

『theatre plateaux』で放送決定！

※詳細は番組ウェブサイト <http://www.t-px.com>へ。



Next Performance Line Up

▼電動夏子の今後

■電動夏子安置システム第14回公演

『#014 赤絨毯(仮)』

脚本・演出: 竹田哲士

2006年5月21日(土)～5月29日(日)

劇場: シアターグリーンエリア171

(JR山手線『池袋』駅徒歩5分)

■電動夏子高松塾

『TVZ (テレビジョーネ)』新春2月スペシャル

脚本: 柳原正吾

演出: 高松亮

2006年2月4日(土)～5日(日)

笹塚Duo Stage BBS

■道井良樹 客演

コマツ企画構成員 川島潤哉 企画公演

『人展』

2006年1月14日(土)～1月15日(日)

新宿シアターP00 1,000円 (ワンドリンク込み)

※詳細は電夏ホームページ

【電夏メンバーの活動情報】でお知らせ致します。

■渡辺美弥子 客演

eLePHANTmoon 『John and Jane Doe Company』

2006年2月24日～2月27日 新宿タイニシアリス

■小原雄平・道井良樹・竹本哲也・中川崇宏 出演

DENDROBIUM映像作品『HERO』

企画製作 DENDROBIUM

詳細: <http://www.dendrobium.jp>

▲客演俳優の今後

■片桐はづき 出演

X-QUEST 『色彩組曲Remix～超伝導ヘキサゴン～』

2006年1月9日(月)～16日(月)

池袋シアターグリーン メインホール

お問い合わせ 03-3530-0527

劇団HP www.x-quest.jp/

※詳しくは折り込みチラシ参照→

■コマツ企画

『恒例春の女まつり～ラ・フェスタ・ウーマン～』

2006年4月6日(木)～9日(日) アイビット目白

お問い合わせ komatsu_kikaku@yahoo.co.jp

劇団HP <http://www.babu.jp/~komatu/>

※詳しくは折り込みチラシ参照

■なしお成

劇団カリバネボタン『ロードランナー』

2006年6月1日(木)～4日(日) 明石スタジオ

お問い合わせ: smm_sbrs1hb_xxx@yahoo.co.jp

※客演随時募集中！

■渡辺裕之

多少婦人『タイトル未定』

2006年7月頃 都内某所

<http://www.rak.jp/town/user/tashofujin/>

■コケシプロ『タイトル未定』

2006年2～3月頃 都内某所

<http://www.011.upp.so-net.ne.jp/o-fruit/>



Other Information

募集のお知らせ

→電動夏子安置システムでは、今後の活動に向けてさまざまな人員を募集しております。
舞台、照明、音楽、映像、制作、企画…貴方に出来ること、これからやりたい事をお知らせください。そしてこの劇団の新たな飛躍のために力を貸してください！

※ 詳細は劇団までお問い合わせください。

電動夏子安置システム/オフィスFLIP-TOP

03-3361-0130

fliptop@dna-system.com

<http://www.dna-system.com>